

No.1 初めて訪れたロシア

初秋とは名ばかりの暑い、暑い日が続く九州を出て約3時間の短いフライト後、足を下ろした地は

冷たい風が吹き渡る秋色深きロシア、ハバロフスクであった。

「寒ーいね!」「風が冷たいね!」と口々に驚きの声を上げながら、到着ロビー行きのシャトルバスに乗り込んだ。

どんなに寒くても暑くても、目指す国に到着して忘れてならないのは、「写真撮影」である。

このツアーに参加した10名も、それぞれのカメラを手にしてシャッターをきり始めた。

私ももちろんその一人である。

そしたら側にいた空港スタッフ数人が、ロシア語で“‘Het,Het’”と言いながら、「ダメ、ダメ」と手で合図をした。

旧ソ連時代の名残であろうか、生活面や経済面はかなり自由になって来たようであるが、

写真にはまだまだ抵抗があるらしい。

また「観光ビザ」取得もそんなに簡単ではない。現地での宿泊、交通などを前もって予約しておかなければならず、その予約を証明するバウチャーが必要なのである。自由に計画して個人旅行をするにはまだ環境が整っていないと言える。

それがこの「ふれあい満喫ハバロフスク4日間」というツアーに参加した、最大の理由であった。

全てが首尾よく手配されているツアーはどこか苦手で、たいていは自分で計画する海外旅行を楽しむ私だが、

ロシアはそういうわけには行かない。

入国審査もスムーズに難無く通過した私達一行は、手配してあったマイクロバスに乗り込んだ。

さあ、いよいよ初めてのロシア、ハバロフスクの旅が始まった。



(歩いてターミナルビルに行くのも久しぶり)



(ハバロフスクの空もすっかり秋景色)

No. 2 結婚の写真撮影でにぎわうレーニン広場

私達を乗せたマイクロバスは、現地のロシア人ガイドの上手な日本語案内と共に、街中へと進んで行った。

このガイドさんはウラジオストク大学で日本語を専攻したそうで、現地の旅行会社に勤めていて、課長をしているらしい。

低い声で淡々と話し表情も崩さないが、それが妙に説得力があり、日本語と

その背景知識はかなりのものであるのが伺い知れた。

人口約58万のこの地方都市は、路面電車やトロリーバスが走り、車の数もそんなに多くなく、クラクションもほとんど聞こえず、全体的に穏やかで静かな街であった。

「ワー、古い電車、トロリーバスも汚いなあ．．．」とか思いながらも、はじめて見るロシアの町並みに目が釘付けとなっていた。

すると、大きなパイプが街中を走っているのに気が付いた。

さっそく「あれは何ですか？」とガイドさんに聞いてみた。

すると、「あれはお湯が通っています」との答えであった。

冬はマイナス30度にもなる日もあるこの地方では、暖房はまさにライフラインであろう。

このお湯が住居やオフィスに暖房用として配管しているそうで、そのおかげで建物の中は結構暖かいそうだ。

いきなり左手に美しい噴水が見えて来た。

「皆さん、レーニン広場です。街の中心地です．．．」との案内で広場を眺めていると、ウエディングドレスを着た花嫁

を中央にして写真撮影が行われていた。

「この時期は結婚式が多いんです。昔は収穫の時期でしたので、そのお祝いの時期に結婚式を行っていたので、

その伝統が今でも残っています。」

バスから見ていると、次から次と純白のウエディングドレスを着た花嫁が出て来る。

広場の近くに公営の式場があるらしく、式を終えた後にこの広場で写真を撮るのが伝統なのだそうだ。

「ロシアでは離婚率が高く、約50%が離婚します。でも、結婚する人も多いです。」と、低い声で淡々とガイドの説明が流れた。

後でわかった事だが、このガイドさんも離婚したそうで、こんな結婚式の様子は色々と複雑な思いがあるに違いないと、想像してしまった。



(どの国でも花嫁の笑顔は最高)



(古い建物と新しいウエディングドレスのコントラスト)

‘No.3 小学校訪問

今朝は、ある小学校を訪問しに行く日であり、出発前から楽しみにしていた。添乗員のお話によると、その学校は英語にとっても力を入れていて、とても評価が良く人気だそうだ。

バスを降りると、校長先生、日本語を話せる女の先生とその息子さんが出迎えてくれた。

この女の先生は5年間ほど日本に住んだことがあるらしく、息子さんも日本で生まれたそうで、日本語は日本人の子供と殆ど変わりがなかった。

ニコニコとして気さくな校長先生は、私達を先ず視聴覚室の様な所へ案内してくださった。

「先ず、ロシアの教育制度からあらましお話をさせていただきます．．．」と、ユーモアを交えながらの学校紹介が始まった。

もちろん、先ほどの日本語のできる女の先生の通訳は欠かせない。

この先生もロシア人かと疑うほど、表情が豊かでニコニコとしいて、ユーモアたっぷりに通訳してくれた。

校長先生の詳しいお話をまとめると、だいたい次のようになる。

- ロシアでは小、中、高一貫教育である。（4，5，3学年制）
- 17歳で高校を卒業するが、その後は徴兵制がある。それを免れるために、大学に行く生徒も多い。
- 先生の給与はあまり良くない。新任の先生で月に約50,000円である。私達は教育の仕事が大好きで、やりがいを持っているので、安い給料でもこの仕事を情熱を持ってやっている。
- 学校の夏休みは6月から9月まで3ヶ月ある。先生達は64日（約2ヶ月）の夏休みがある。
- ロシアでは先生達は同じ学校にずっと勤務するのが普通である。
- 先生の定年は55歳だが、その後もずっと勤務する先生がほとんどである。なぜなら年金がどうかすると家賃よりも低い場合があるので、倒れるまで働いている先生も多い。（ユーモア）
- 子供が3人以上になると、給食費は無料になる。また、経済的な理由から子供を一人しか生まない夫婦が増えたので、少子化を改善するため5年ほ

ど前に「子供手当」が始まり、2人目を生むと年に約百万円のお金が国からもらえる様になった。このお金の影響で、子供を2人持つ夫婦がだいぶ増えた。また、この子供手当では使い方が決まっており、「住宅ローンOR教育費」となっている。

- 今だに幼児死亡率が高く、出生率を上回っている。
- この学校では英語教育に力を入れており、低学年は週2時間、高学年からはほとんど毎日英語授業がある。
また、中学年の外国語の選択科目としてフランス語と日本語も2年前から始めた。
- 先生一人当たりの生徒数は25～35人と、日本に比べると少ない。
- 学校の掃除は教育上とても良いのでさせたいのだが、国の法律で子供の労働は禁止されているのでできない。

以上の様に、本当に詳しく楽しく説明して下さった。

説明が終わった後は、校内を案内して下さり、授業の様子も見せていただいた。

どのクラスも、子供たちは私達を起立をして迎えてくれ、私達が向けるカメラに恥ずかしそうに照れ笑いをしていた。

日本の同年齢の子供たちと比べて、とても純朴な感じがした。



(起立して迎えてくれた子供達)



(工作の時間)

No.4 シベリア鉄道

シベリア鉄道. . . 何とロマンを掻き立てる響きであろうか。極東ウラジオ
ストクとモスクワまでを結ぶこの鉄道は、

全長約9000kmもあり、もちろん世界一の長さを誇っている。もしも、
ウラジオストクからモスクワまでこの鉄道を使うと、7泊8日もかかる。そ
んな長い列車の旅を想像するだけでも、ロマンが香り立つ。

そのシベリア鉄道に、一時間の短さとは言え乗車できるのが、今度の旅の最
大の魅力のひとつだった。

ダウンの冬のジャケットを着込み、朝の冷気に体を縮ませながらハバロフス
ク駅に着いた。

きれいに並んだ枕木や太い線路を見ていると、列車の到着が待ち遠しい。

すると、ゆっくりと東のほうから列車が入って来た。ウラジオストクから一
泊かかってここまで来た列車である。

大陸の広大さがうかがい知れる。

車両のドアが開くと、皆が嬉々として乗り込んだ。この車両は私達10人専
用になっていて、そこはさすが大手の旅行会社のツアーだと感心した。

列車の中はなかなか雰囲気良く、掃除もきれいに行き届いていた。

数分で走り出し、皆の興奮も最高潮に達したようだ。

やがて車窓に流れる景色に目が奪われて行く。

秋風にそよぐ白樺の林、どこまでも続く大地、見慣れない花、何を植えてあ
るのか解らない広い畑. . .

様々に変化する景色に心奪われていると、列車がいきなり川の上に浮かんだ
様に思えた。

「アムール川だ！」

列車が広い、広いアムール川にかかる鉄橋を渡っていた。その数分間、私達
は天上の世界にいるかのように感じた。



(私達が乗った列車)



(みんなこの時を楽しみにしていた)

No.5 農家訪問

一時間のアッという間のシベリア鉄道だった。

列車を降りた後すぐにマイクロバスに寄せられ、そのままハバロフスクへと

引き返した。

こういった点がツアーの特徴である。

個人旅行ならば、降りた駅の町なり村なり多少なりとも観光するであろう。

そして夜にまたシベリア鉄道に乗ってハバロフスクに引き返す。

何はともあれ、ハバロフスクへ引き返したマイクロバスはそのまま、次の予定地へと向かった。

次の予定地は「農園」なのである。市街地から約一時間離れたところに、ミハエルさんの農園があった。

ロシアでは昔から自宅から遠い場所に農地があるため、田舎にセカンドハウスを建てて、そこに泊り込んで畑の世話をするのが主流だそうだ。

ミハエルさんもその一人で、ハバロフスクに自宅があつて、この農園にあるのはセカンドハウスだそうだ。

青い屋根と白い壁がとてもモダンな、まだ新しいセカンドハウスだった。

皆がバスから降りると、ミハエルさんがにこやかに迎えてくれた。

“Welcome!” と久しぶりに聞く英語を話すミハエルさんは40代前半ぐらいだろうか、なかなかのハンサムだった。

「私は約15年前にこの農園を始めました。最初は野菜や種を出荷していましたが、競争が激しくなり価格が低迷してきましたので、今は苗木だけをやっています。キュウリ等の野菜は誰でも簡単に作れますが、苗木は特殊技術が入りますので、私の他には誰もできないんです。」と、いきなり吸い込まれるような面白いお話が始まった。

私達に農園の案内をしてくれながら、説明はさらに続いた。

「農園の広さは10ヘクタールです。従業員は20人です。近くの村から主に雇っていますが、他に仕事も無いのに、なかなか農作業の仕事はやりたくない様で、労働力の確保が難しいです。」

リンゴ、ナシ、プラムの苗木を主に栽培しているが、去年は寒さが異常に厳しくて、リンゴが被害を受けたらしい。

「これらの苗は一本2700円で売れます。利益率は50%です。また苗木販売事業のシェアは私の事業の10%位で、

他に農業用資材の販売もやってまして、そちらのほうが主な事業です。」と誇らしげに説明をする姿は、やはり英語圏などと共通している。きっと自己をアピールする文化性なのであろう。

聞けばテレビの園芸番組にもよく出演され、ガーデニングの講師をされているようだ。

なかなかのビジネスマンであることがうかがい知れた。

「ロシアでは土地は所有できないと聞いていますが、農地も借りているんですか？」と、誰かが質問した。

「ここは元はコルホーズの所有だったんですが、無料で譲り受けました。また、山林や荒地を開拓した分も自己所有にしているんです。」と、羨ましいような話だ。

「日本では、農業保護のために政府が色々な補助金を出していますが、ロシアではどうですか？」これは、私がした質問である。

「ロシアでは政府からの補助金は全然ありません。日本の農業が羨ましいです」

農業も特別に保護されてなくて、他の事業とまったく同じ環境にあるらしい。道理で経営センスというか、ビジネスセンスが良いはずだと納得した。

このミハエルさんはハム通信や絵も趣味だそうで、ここにあるセカンドハウスの設計も自分でされたそうだ。

おトイレを借りに2階に上がると、ロシアではまだ珍しいデジタル放送用の薄型TVに天体望遠鏡、そして大きな正面の窓に映る風景はまるで一服の絵のようだ。後で本人にお聞きしたが、その窓はそのように本人が設計したのだそうだ。

1階の事務室も見せていただいたが、フル装備のハム設備とインターネット設備がラインナップ。

ビジネスがうまく行っている事の証であろうか。



(野生のブドウについてお話をするミハエルさん)



(高い値段で売れるアンズの苗木、雑草は気にしないようだ)

No. 6 シベリア抑留と日本人墓地

こちらに着いてからガイドさんがよく口にする言葉、それは「この建物は日本人達が建てたものです」「この建物もそうです」

また、ホテルのは美しい公園の一角にあるが、その公園も日本人捕虜の労働によるものらしい。

「シベリア抑留」．．．日本の降伏の7日前に参戦したソ連は、満州、樺太、アリューシャン列島にいた日本兵を襲い、捕虜にした。そして、70万を超える日本人捕虜が500以上の部隊に分けられシベリア各地に強制移動させられ、過酷で劣悪な環境で強制労働をさせられた。

酷寒と飢えと重労働に耐え切れず病に倒れ、命を落とした抑留者の数は何と6万人にも上ると言う。

実は、私の叔父もシベリア抑留から帰還していて、あまり多くは語らなかったが、私が幼い時に折に触れ、現地の過酷さの話をしていたのを覚えている。

ここハバロフスクにも多くの関東軍兵士が抑留され、捕虜として奴隷のような過酷労働をさせられたらしい。

そして、無念の死に倒れた犠牲者の数は約300名にもなると言う。

旅行最終日の朝、飛行場に向かう途中で、この方達の眠る墓地を訪れる事ができた。

添乗員さんがロウソクとお線香を用意していて私達に手渡されたのは、とても良かった。

白樺に吹き渡る風が爽やかな音を立てている。

慰霊碑のお線香のけむりが、凜とした朝の冷気に吸い込まれて行く。

手を合わせて心より拝ませていただいた。

「本当にご苦労様でした。日本のために戦っていただいて、ありがとうございました。」

すると、

「熊本からなの？よく来たね！帰ったら日本の皆さんによろしくね。」と、そんな声がどこからか聞こえて来たような気がした。



(平和の尊さを教えてください。合掌)



(みんな心を込めて祈っている)

プロローグ

今、私は帰りの飛行機の中に入る。

福岡までわずか3時間のフライトだ。

下界は曇っていて何も見えない。

目を閉じると、学校訪問をした時の子供達のはにかんだ笑顔、

また、農園を訪問した時にご馳走になったおいしいボルシチ、

そして、心深く残った日本人墓地. . .

まだまだ個人の自由旅行が困難なロシアであるが、あと5年もすればもっと開放されていて、

旅行しやすくなっている事だろう。

その頃は英語の表示や、英語が解る人も増えているに違いない。

次回はもっと自由旅行のスタイルで、長く滞在したいものである。

縁(えにし)深き大国ロシア. . .

願わくば、悲しみや憎しみのページ数より友好のページ数

が多くなりますように. . .

*終わり

